

かやかや馬

ふるさとの祭りと年中行事 ⑤

七夕祭りと草馬

七夕の朝に
草を刈る

長かった梅雨が明け、蟬しぐれの季節を迎えるころ、かつての村々では「七夕馬」の行事が催されました。もともと、旧暦の7月7日に行われていた民俗行事で、その祭事は、主に子どもたちを中心とするものでした。

前日の夕刻、笹竹に色紙の短冊を飾り、その下に、ムギワラやマコモで作った「草馬」をつなぎました。七夕の朝、未明に草馬を引いて村境に行き、チガヤ・マコモ・ヒエなどを刈り、それを積んで帰るのが一般的でした。

宮廷から
庶民の祭りへ

この「七夕祭り」は、いわゆる星祭りの一種とみられ、牽牛・織女両星のロマンスは、古く中国の後漢（西暦二五〇―二二〇年）の時代にまでさかのぼると伝えられています。7世紀の末には、すでに日本でも七夕の星祭りが行われたという記録があり、宮中の大切な行事としても定着し、人

びとは七夕の笹竹に色紙を添えて、書道や裁縫の上達を祈りました。

現在の七夕祭りは、ほとんどが新暦となり、梅雨の最中に行われています。かつては、旧暦の7月1日「釜の蓋の朔日」に続く、「盆」行事のひとつでもあり、七夕の前後に「墓掃除」が行われました。子どもたちの引く草馬も、昔の「迎え馬」の名残りと思われる、やはりお盆の行事だったのと考えられます。

牛馬を労る

「感謝の祭り」

さて、横芝地方の草馬は、俗に「かやかやうま」と呼ばれ、ムギワラを芯材として、主にマコモで作られました。その「たてがみ」には、田植え後、荒神の棚に供えてあった稲（早苗）の根が用いられました。草刈りを終えたあと、その刈り草で馬のいる屋根を葺いて、やがて餅や麺類を盛った小皿が供えられました。場所によっては、馬のほか牛も作

って、2頭引いて草を刈り、「ぬか汁」と「ごま汁のうどん」を供えたともいわれます。七夕の夕刻、笹竹は川に流され、草馬は屋根の上に投げあげられたり、屋敷神（氏神）の裏に納められました。これによって、草馬の霊は天へと昇り、俗世のけがれは川に流されました。

刈馬」「茅々馬」などと称されました。いずれにしても、ふるさとの七夕祭りは、単なる星祭りに留まらず、田畑の耕作に活躍した畜類、とりわけ牛馬に対する「感謝の祭り」でもあったものと理解されます。

文化財審議委員

伊藤 一男



七夕の朝静かに出番を待つかやかや馬